



Title	＜翻訳＞モケット著「ジャワ最古のイスラム碑文」翻訳と補論：イスラム碑銘学・海域史の視点から
Author(s)	向，正樹；深見，純生
Citation	アラブ・イスラム研究. 2017, 15, p. 45-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105978
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

モケット著「ジャワ最古のイスラム碑文」翻訳と補論 イスラム碑銘学・海域史の視点から

向 正樹（訳）／深見 純生（監訳）*

Moquette, “The Oldest Islamic Inscription of Java” —— With Epigraphic and Maritime Historical Notes ——

Nearly one hundred years have passed since the publication of J. P. Moquette’s article, “De oudste Moehammedaansche inscriptie op Java n.m. de grafsteen te Lérán” (The Oldest Islamic Inscription in Java, esp. the Gravestone of Lérán) in December 1919. It is meaningful that the Japanese translation with additional notes is given here due to its long-lived importance as follows.

Firstly, according to him, the gravestone had been transferred to Java (so, it appeared not to be the oldest Islamic Inscription of Java at all) and was made in relation to the local Islamic tradition regarding Putri Suwari and Malik Ibrahim; the latter was one of nine Muslim propagators (*Wali Songo*) in Java. Moquette’s deliberate observations and cautious conclusion on the ‘geographical credibility’ (as detailed by Paul Ravaisse having worked on the same topic) made his article firmly valid. In spite of Ravaisse’s opposition in 1925, Moquette’s viewpoint was accepted and further elaborated on by L. Kalus and C. Guillot in 2004.

Secondly, Moquette’s article contains several valuable descriptions of the missing gravestones and the Mausoleum of Putri Suwari in Lérán through the course of his analyses of the nineteenth century’s European eyewitnesses. The information about the gravestones and the mausoleum collected by Moquette present clues for further research on the transition of the cultural condition in Javanese society in the nineteenth century because the conditions around them have thoroughly changed over the last hundred years, and the mausoleum was totally rebuilt.

Thirdly, Moquette’s hypothesis, which was verified by Kalus and Guillot, presupposes the existence of sea routes extending from the earlier Islamized region to Lérán, a small village considered to have prospered as a centre of maritime trade during the eleventh to fourteenth century prior to the famed Gresik and Surabaya in the later period. Accordingly, the gravestone of Lérán would never lose its value as historical material, but would acquire other historical significance in the context of maritime history.

* 同志社大学 准教授 / 桃山学院大学 元教授

解題

本稿はジャン・ピエール・モケット Jean Pierre Moquette が20世紀前半に発表した論文「ジャワ最古のイスラム教碑文——レランの墓碑——」(J. P. Moquette, “De oudste Moehammedaansche inscriptie op Java n.m. de grafsteen te Lérán,” *Handelingen van het eerste congres voor de taal=, land= en volkenkunde van Java, Solo, 25 en 26 December 1919*, Weltevreden: Albrecht, 1921, pp. 391-399 + 4 fotos) を和訳し、補論を加えたものである。モケットは1856年、オランダに生まれ、20代半ばからジャワ（当時のオランダ領東インド）に移り、スラバヤなどで実業家として活躍した。一方でインド・東南アジアのイスラム墓碑や古代史をはじめ幅広い分野で著述を行い、1927年、本稿を執筆したウェルテフレーデン Weltevreden（ジャカルタ市中心部）で没した。

この論文は1919年12月の学会における発表から100年近くが経とうとしているが、以下のような点で、今日もなお参照する価値を保っている。その理由のひとつは、ジャワ最古のアラビア語で書かれたイスラム教徒の墓石とされる所謂「レランの墓碑」が、元来ジャワのものではない可能性についての問題提起がモケットにより本論文で初めて示された。レランの墓石は、数年後、フランスのイスラム碑銘学者ポール・ラヴェスの論文によってジャワ現地産のものとされたが[Ravaisse 1925]、2004年にソルボンヌ大学教授・イスラム碑銘学者のルトヴィク・カルスとフランスの考古学者クロード・ギョーとがこの墓碑について再検討し、ラヴェス論文の説に対し大幅な修正を行い、モケットの仮説を証明した（ラヴェス論文とカルス&ギョー論文の比較検討は別の機会に譲りたい）[Kalus & Guillot 2004]。ただし、カルスらの論文はレランの墓碑は孤立した墓石ではなく、同様のデザインや石質の四つの墓石（三つが現存する）とひとまとまりの墓石群と捉え、ジャワへの搬入も同時に行われたと見ている。

重要なことは、モケットの仮説が証明されたことにより、レランの墓碑がもはや完全に「ジャワ最古のイスラム教碑文」とは認められなくなったということである。元来、レランの墓碑はプトリ・スワリという名の王女の墓廟に彼女の墓石として祀られていたものであった。彼女はマリク・イブラヒムの手引きによってマジャパヒトの王に嫁ぐためにグダという王国からやってきて現地で亡くなったとされている。マリク・イブラヒム（1419 CE 没）はジャワにイスラムを宣教した九人の聖人（ワリ・ソンゴ Wali Songo）の一人である[桃木他編 2008: 495-496; Ricklefs 2006: 17]。モケットの論文で、レランの墓石はこの伝承とは時代が合わず、碑の内容もこれらの人物とは合致せず、レランの墓碑と現地の伝承との間には本来は何の関係もなかったことが明らかにされたのである。しかし、レランの墓碑そのものが、ジャワ現地で彫られたものなのか、それとも外部から運ばれてきたのか、という問題については、モケット論文とラヴェス論文の間で意見が割れたまま今世紀を迎えた。

ただし、わずかな例の偶発的なイスラム教徒の存在の証拠によって、ジャワへのイスラム伝播の歴史の大枠が揺らぐことはないだろう。ジャワでの本格的なイスラ

ム受容は16世紀を待たねばならないというのが通説であり [Ricklefs 2006: 14]、ジャワにおけるイスラム教徒が存在することの最初の証拠としても、信憑性の問題を含んだレランの墓石は控えめにしか取り上げられてこなかった [Federspiel 2007: 20]。近年、考古学的にはマジャパヒト朝王宮の置かれたトロウラン出土のイスラム碑文群がジャワ人ムスリムの存在を示す確実な証拠としてクローズアップされている。その最古の紀年は、1368～1369年である [Ricklefs 2006: 12]。

また、本論文でモケットは、レランの墓石（とおぼしき石）を見たヨーロッパ人が書き残した記録のなかにみられる錯綜した情報を整理している。それらの混乱に関してモケットが提起した様々な疑問も、新たな視点から再び見直される余地を残している。モケットの整理した情報の中には、レランの祀廟の当時の状況など貴重な報告が記されている。その祀廟の建物はかつて、今日のようなジャワの一般的なイスラム墓廟らしい見かけではなく [Kalus & Guillot 2004: 21, Fig. 2]、よりヒンドゥー風の佇まいを見せていた。モケットは1912年にリンクス博士の調査隊によって撮影された写真をもとにその構造を分析し、その一部はヒンドゥー時代に遡るとみている。これもジャワの文化的環境変化に伴う宗教建築の変遷を物語る貴重な例である。

さらに、レランの墓石群は他地域からジャワへ運ばれた、というカルスらの論文によって導かれた結論にも関わらず、レランの港市としての歴史を踏まえるならば、本碑文の歴史的価値は依然として高いと考えられる。中東からの墓石群の移動（カルスらの推定によれば貿易船のバラストや碇石として）というのは [Kalus & Guillot 2004: 33-34]、11～14世紀のレランと中東地域との海上交通の存在を前提とする話であり、この碑文はジャワにおける中東方面との海上交易の主要港市の変遷史において、新たな意義をもつと考えられるのである。

レランの墓石は、モケット論文の時点ではレラン村の墓地にあったが、1997年にモジョクルトの博物館に移され、現在もそこにある。カルスらによれば、レランの墓石と一連のものである他の四つの墓石があったが、そのうち一つは所在不明で、残り三つは同博物館にあるという [Kalus & Guillot 2004: 20]。筆者らが2013年8月、現地調査を行った際には、レランの墓石をモジョクルトの郊外トロウラン村にあるマジャパヒト博物館 Museum Majapahit の屋内展示室に確認することができた。一見したところ、デザイン・字体・彫り方、石質（大理石のように見える）や劣化の状態は他の現地産のイスラム墓石と明らかに異なる。

以下に、4頁から14頁にモケット論文を和訳して、次に筆者（向）の補論をつけ加えることとする。なお、モケットの論文には章立てがないが、本稿では便宜的に章立てを行う。

1. はじめに
2. 従来の知見とくにプトリ・スワリ伝承
3. レラン墓石をめぐる情報の混乱
4. レラン刻文の解説

5. レラン墓石は到来品

6. 墓廟の写真（リンケス、1912年）

1. はじめに

[原文 p. 391, l. 1~]

グルシックから北西約6キロにレラン村があり、そこにある墓地のなかに小さな建物が立っている。それは部分的にはどうやらヒンドゥー時代にさかのぼるようであるが、しかし部分的にはもっと後の時代のものであることが確かである。

リンケス博士〔Douwe Adolf Rinkes〕のおかげで、私はここに、上述の建物の2枚の写真を提示することができる。あとでより適当な箇所において参照するよう指示するであろう。

伝説は次のようにいう。それは、マリク・イブラヒム Malik Ibrahim によって、チュルメン（他ではチュルメ、ブルミンあるいはグダ）の王の娘プトリ・デウィ・スワリを敬慕して建てられた祠堂であると。かれはヒンドゥー教徒たちを改宗させるため、そして可能ならその娘を当時のマジャパヒトの王に嫁がせるために、ジャワにやってきた。

この試みは失敗し、ある物語によれば伝染病のため、別の物語によれば心痛のため、その王女はレランで死んだ。そして彼女はそこで、幾人かの親族と一緒に埋葬された。かれらの墓（クブル・パンジャン＝「長い墓」）は、その聖域の内の彼女の墓のとなりに見ることができる。

上に簡単に触れた伝承に批判的検討を加えることが私の目的ではない。

たいていの論者がそういうように、その出来事はジャワの紀年の1313年＝1391 CE 頃に起こったというのが正しいとするならば、著名なマリク・イブラヒムがその際に役割を果たしたことは大いに考えられる。なぜなら、かれの没年はヒジュラ暦822年＝1419 CE であることが知られ、この年号はそのグルシックの墓碑のなかに、いまでも確認されうるからである〔ジャワの紀年とは、ジャワで1633年まで使用されていたシャカ暦のこと。〔桃木他編 2008: 163-164〕——訳者注〕。

しかし、プトリ・スワリの死亡日の確定の過程で、われわれは大きな困難に遭遇する。レランの彼女の墓の中とそばとにふたつの〔異なる年号をもつ——訳者注〕石碑が存在するからである。ひとつはチョンドロ・スンコロ〔ジャワの古い伝統で、数字を象徴する語彙を並べ、年号を表すもの——訳者注〕が刻まれ、もうひとつは古いアラビア語碑文をもつ。

この刻石にさらに立ち入っていく前に、われわれはまず、それについてこれまで様々な書き手によって言われたこと、あるいは言われなかったことについて、調べてみたい。

2. 従来の知見とくにプトリ・スワリ伝承

[原文 p. 391, l. 31~]

最初に、トマス・スタンフォード・ラッフルズ Thomas Stamford Raffles は、1817年に『ジャワの歴史』を出版し、チュルミンのラジャの伝承について、現地の書き手たちがいかにラジャとマウラナ・イブラヒムの間に関係を探しもとめたのか語っているが、かれは王女の墓については注において「彼女の墓はいまも残っている」と言うにすぎない¹⁾。

[原文 p. 392, l. 3~]

他の箇所では、チョンドロ・スンコロによって年号を表現するジャワ人の習慣について語りつつ、かれは次のようにいう²⁾。

…同様に、グルシックの、チュルメ Chermai の王女の墓廟（1313）のそばにある長い墓の日付は、このように表現されている。

カヤーウラン—プトリ—イク
3 1 3 1
（月のごときこの王女）

そのチョンドロ・スンコロがいかなる形をしているのか、かれは述べていない。

ジョン・クロウファード John Crawfurd は、伝承についても、その王女あるいは彼女の墓地についてもまったく述べていない。ただ次のようにいう³⁾。

チャルメン Chärmen のラジャと呼ばれる外来人とマウラナ・イブラヒムという名のアラブ人によって、サリヴァナ暦〔シャカ暦〔Crawfurd 1820, vol. 1, p. 300〕—訳者注〕1313~1391 年にイスラム教を宣揚する試みがなされた。

A・D・コルネッツ・ド・フロート Cornets de Groot はグルシックの理事官として、1822年に政府への報告のなかで次のように書いた⁴⁾。

チュルミンの王のジャワ到来の年号はこうである：タフン（年）—ギドゥル（南へ）—ブミ（土地・くに）—グロン（北へ〔西への誤りか—訳者注〕）、すなわちジャワ暦1313年。月がプトリ・チュルマンの墓の頭部側の端に直立している石に刻まれており、その中に、以下のことが表現されている。カ

1) Raffles, *History of Java*, 1817, vol. 2, p. 114.

2) *ibid.* vol. 1, p. 372.

3) Crawfurd, *History of the Indian Archipelago*, 1820, vol. 2, p. 306.

4) Groot, *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië*, 14e jaargang, 1852, vol. 2, p. 411.

ヨーウランーブトリーイコ（この王女は月のごときであった）すなわち数字で1313。その頭部側の端の近くに傾いた石が立ち、そのなかにアラビア文字の年号が書かれている⁵⁾。

W・R・ファン・ホエフェル博士 van Hoëvell は、1847年に、マリク・イブラヒムの墓石について、また、グルシックと周辺で見たそのほかの注目すべきことがらについて、詳細な記述を与えている⁶⁾。しかし、レランとプトリ・スワリの墓などについては、かれは残念ながら語っていない。

J・J・G・ブルムンド Brumund 師は、1868年、レランで埋葬された王女の墓について次のように述べている⁷⁾。

頭石は、尊敬のしるしとして、ボレー〔身体に塗る装飾用クリーム——訳者注〕を塗られていた。人々は私に、彼女の墓のそばに文字の書かれた石があったと言った。しかし、私はそこに、時間の経過によって黒くなった大理石板の断片しか見つけることができなかった。それにはアラビア文字が刻まれ、壁面に立てかけられていた。

かれは、粗末な墓にしては堅固で豪華すぎると思われたその建物に当惑させられたまま、次のように自問している。

おそらく、そのなかではかつて素晴らしい墓々が輝いていただろうが、倒壊した屋根によって粉碎され、大理石板の断片がいまも残っているだけであると考えなくてはならないのだろうか⁸⁾？

[原文 p. 393, l. 1~]

J・クネーベル Knebel は、1907年、レランの墓地のことを記録し、6行のアラビア文字をもつ、高さ0.82 m、幅0.45 mの石を見ている⁹⁾。それは、プトリ・スワリの祀廟の中から出され今も表に出ている。そしてかれは、レランの鍵番であるハジ・アブドゥルガニ所有の『ババッド・クブル・パンジャン（長墓歴史物語）』にもとづいて、次のような新たなチョンドロ・スンコロを示している。

5) 斜体字部分は原文のイタリック体部分を示す。

6) Hoëvell, *Reis over Java, Madura en Bali*, 1847, vol. 1, p. 151 以下。

7) Brumund, *Verhandelingen van het Bataviaasch genootschap van kunsten en wetenschappen*, 1868, vol. 33, p. 185.

8) 斜体字部分は原文のイタリック体部分を示す。

9) Knebel, *Rapporten oudheidkundig onderzoek*, 1907, p. 255-256.

プトリールサックーナワンーウラン

8 0 3 1

すなわちシャカ暦1308=1386 CE

クネーベルによって引用された故ラデン・アディパティ・アリオ・スリオ・ウィノトの一文書のなかでは、その王女はプトリ・デウィ・シティスダリと呼ばれ、彼女の父はロジョ・グダと呼ばれている。

なかに月をあしらった〔上述のコルネッツ・ド・フロートが伝えた〕あの墓石について、クネーベルは残念ながら語っていない。そして〔シャカ暦1308年を示す〕この新しいチョンドロ・スンコロの来歴も、まだはっきりしない。

念のため、我々はこちらでさらに、J・ハーヘマン Hageman・Jcz.の記述を付け加えることができる。かれは1852年に『ジャワ史の知識への手引き』を出版し¹⁰⁾、そのなかで次のように述べる。1382年にマリク・イブラヒムを含む最初のアラビア人たちがジャワにやって来た。そして、1399年にはチュルメという名のスマトラ東海岸州の島々のひとつから来た王もまた、かれの娘プトリ・デウィ・スワリとともに、グルシックにやって来た(目的は上述のとおりである[「はじめに」参照——訳者注])。やがてこの娘が死んだ後、彼女をレランに埋葬し「いまもそこに彼女の墓がある。」

さらに彼は言う。「この場所には、マリク・イブラヒムによってジャワで最初のイスラム教寺院が建設され、1409年に完成した。」私は残念ながら、ハーヘマンがどのようにしてこれらののすべての年号をはっきり確定できたのか、私は見いだすことができていない。そしてまた、かれがどのようにして、そのチュルメという島についての知識に至ったのかを追跡することもできていない¹¹⁾。

3. レラン墓石をめぐる情報の混乱

[原文 p.393, l. 27~]

いま上述のような情報を互いに比較するとき、すぐに次のことが明らかとなる。最も古い情報、すなわち、ラッフルズはたしかに、1313年を意味しているに違いないチョンドロ・スンコロについて述べるが、アラビア文字の刻文をもつ墓石については沈黙している。

クロウファードはラッフルズを部分的に踏襲し、年号だけを取り入れている。

「ふたつ」の墓石——ひとつの墓石には1313年を表すチョンドロ・スンコロとして

10) Hageman, *Handleiding tot de kennis der geschiedenis van Java*, vol. 1, p. 23, §45を見よ。

11) 事柄をこれ以上混乱させないように、私は J.A.B. Wiselius, *Tijdschrift voor Indische taal-, land- en volkenkunde* 23 (1876) を割愛した。われわれはすでに十分多くの——私の見解によれば不正確な——チョンドロ・スンコロを上挙げた〔のであるから〕。注目に値するのは、かれがグダの位置をテルナテ〔クロブ産地であるマルク諸島の都市でムスリム王国があり16世紀に栄えた——訳者注〕の近くにもとめていることである (p. 466)。

の「月」が含まれており、もうひとつの墓石には、アラビア文字の「年号」が書かれている——について述べる最初のもは、コルネッツ・ド・フロートである。かれによると、われわれはかくして単なる月（それは半月であるにちがいないだろう）から、コヨーウラン・プトリーイコというチョンドロ・スニコロを読むことができるはずである。それが可能であるかどうかは、もっと資格のある人に任せるべきであるが、私のテーマ、つまり、アラビア文字の年号をもつ墓石にかんしては、私はかれの表現からは、当時、ヒジュラ暦793年つまり1313+78年すなわち紀元後1391年の年号をもつ墓石があったと、結論せざるをえない。

[原文 p. 394, l. 4~]

そこに当時そのような墓石が立っていたとすれば、いまでは消えてしまったらしいのだが、かれがこの後で取り上げる墓石を見たのだとするならば、私の意見によれば、事柄についてのかれの表現の仕方が不正確なのである。

ファン・ホエフェルがレランについて述べていないのは残念なことである。というのは、とりわけ、かれの後任のブルムンドがわれわれの前に新たな謎をもたらすからである。

とはいうものの、かれはプトリ・スワリの墓にある頭石は、敬意のしるしとして「ボレーを塗られていた」と述べる。

ボレーの下には月が隠されているのだろうか？誰もそうは言うまい。さらにかれは、時間の経過によって「黒くなった大理石の板」の「断片」が壁によりかかっているのを発見した¹²⁾。かれは2度まで「断片」という言葉を使っているので、かれは完全な墓石を見てはいないということを確認できる。

クネーベルはこれに対して、6行のアラビア文字の刻文をもつ、高さ0.82 m、幅0.45 mの墓石を記録している。

1868年から1907年頃（なぜならクネーベルによればかれが見た墓石は、その直前にスラバヤの理事官の命令でサルズウェーデル *Salzwedel* によって撮影された、と言うから）の間に、その石は、諸記録に基づくならば、その後変化を蒙り、断片から完全な墓石に変わった。これはどう考えたらよいのか。

しかも、ブルムンドは、——フェット *Veth* とともに私にとって残念に思われることには——その石をさらに詳しくは調査しなかったものの、やはり、かれがひとつの完全な墓石を断片とみなすような間違いをするだろうか？

クネーベルは、そこに月が彫刻された墓石を見ておらず、その墓（クブル・パンジャン）の上に普通のマヘサン〔一對の墓標——訳者注〕だけをみたブルムンド師を引用するのみである。

クネーベルはしかしアラビア文字でつづられた『ババッド・クブル・パンジャン

12) P・J・フェット *Veth* 博士『ジャワ』第2巻（初版）, p. 186, 注1〔1912年刊の第2版では第1巻, p. 232——訳者注〕に「光をあてることができたであろう唯一のものであるアラビア文字が刻まれた大理石板の断片は、かれによってそれ以上研究されなかった」という。フェット博士もこの「断片」(fragment) という語を断片と解している。

（長墓歴史物語）』〔前述——訳者注〕を見、そのなかに上に言及したように新しい年号が現れてくる。いわゆるペゴン文字〔ペゴンはアラビア文字表記のジャワ語のこと——訳者注〕であるので、そのババッドは古いはずがない¹³⁾。

こうして私は、アラビア文字の刻文をもつ墓石について、相互に比較すると一致しない3つのデータしか見つけられなかった。

コルネッツ・ド・フロートは、（私の見解によれば）シャカ暦の1313年と一致するアラビア語の年号をもつ墓石について述べる。

ブルムンドは墓石の断片のみを見つけ、クネーベルは6行のアラビア文をもつ完全な墓石を見た。

最後に述べた墓石は現在もまだそこに立ち、数年来私の関心を引いている。

[原文 p. 395, l. 1~]

1912年3月、D・A・リンケス博士がグルシックとレランを訪問した。かれはマリク・イブラヒムの墓石を、並んで立つふたつの墓とともに可能な限りで修復することに成功することができただけでなく、かれはまた、レランの墓石をしばらくの間バタヴィアへ送ることの同意も得ることができた。

かくして我々はいかに、その墓石の良好な写真¹⁴⁾と石膏の型とをここで作られることができることを、また同様に、我々がその石質を、鉱業局を通じて特定させることができる機会に恵まれたことを、感謝する。

1912年5月9日付の鉱業局長の報告によれば、その墓石は「ジャワやスマトラのいろんな場所で見られる黒味がかかった石灰石である¹⁵⁾。」

私は一種の粘版石と関わりをもつと考えたが、のちにこのようなことは素人考えであることが分かった。そして、上の記述は私には幾分ぼんやりとしているようにおもわれたので、私はその墓石の上部にくっついている小さい破片を G・P・ルーファール Rouffaer 氏に送り、それをかれが元鉱山技師にして地質学者である E・C・アーベンダノン Abendanon に調べてもらったところ、1912年9月14日に次のように断定された。「粘土のようにひび割れた小さな雲母片をもつきめ細かい青い石灰岩で、第三紀よりも古いとみられる。」

これが石質にかんする事柄である〔カルス&ギョー論文では、新たに地質学者の鑑定をもとめた結果、灰青色の上質な大理石とされる——補論参照〕。

この問題に関心をもつ各人がみずから判断することを可能にするため、私はここにその墓石の写真を付す。そこから、クネーベルはまさにそこに断片を見たのではなく、かれは上部の風化によってミスリードされ、そのために第1行目の刻文を見なかった、ということが分かる。

13) フセイン・ジャヤディニングラット博士が私に示唆したように、より古い文書からの写しというのでないならば。

14) J. J. de Vink 氏による。

15) [Anonym.] *Notulen Bat. Gen. K & W*, 1912, p. 53. [未確認——訳者]

4. レラン刻文の解説

[原文 p. 395, l. 26~]

さて、ここで刻文自体 [について、である]。[写真1, 2を参照——訳者注]

これは疑いなくアラビア文字で記されているが、ひじょうに古いタイプのものである。カール・ファウルマン Karl Faulmann は、これらの字体を模写し、それらを、より有名なクーフィー体のあたらしい形態である、カルマティー体 Karmatisch と名づける¹⁶⁾。

私は、我々の刻文の分析をより資格のある者に喜んでゆずり、それによって読みが妨害されることはほとんどないが、非常にしばしば字体が互いに異なっていることだけを確認しておく。

私が他人の手柄を横取りしたという印象を与えないように、私は少し手短に、いかにして私がこの墓石の研究に至ったのかを開陳しなければならない。

1911年の5月末か6月初、G・P・ルーファールが私の近くにいたが、かれは私がパサイの墓石の写真の解説に従事していたのを見て、私に私の能力をレランの墓石の読解に向けることを依頼した。かれはそのとき、マックス・ファン・ベルヘム Max van Berchem 博士がそこからすでに [次のような文を] 読みとっているということを私に知らせた。「ファータィマ・ビン・マイムーン・ビン・(アブド=?) アッラー Fatimah bint Maimoen bin (Abd?) Allah.....金曜日ラジャブ月475年か495年。」のちになってはじめて、Dr. スヌーク・ヒュルフローニエ Snouck Hurgronje 教授の報告 [未確認——訳者注] によって、その読みは全く完全であるというわけではなく、4、5および6行目は、アブド=アッラーという推測と年号の70年と90年の間の躊躇を除いてすべて読まれている、ということが明らかとなった。

[原文 p. 396, l. 9~]

その報告には次のようにある。行は石上の順序にしたがう [碑文テキストについてはその後の研究で異なる読みが示されている。本稿末尾の補論を参照——訳者注]。

بسم الله [الرحمن الرحيم كل من]	١
عليها فان و يبقى وجه ربك ذو الجلا	٢
ل و الاكرام هذا قبر الشهيدة	٣
فاطمة بنت ميمون بن هبة الله توفيت	٤
في يوم الجمعة سبعة (...) خلون من رجب	٥
و في سنة خمسة و تسعين و اربع مائة الى رحمة	٦
الله (...) صدق الله العظيم و رسوله الاكرام	٧

16) Faulmann, *Illustrirte geschichte der schrift*, 1880, p. 419. ファウルマンは Carsten Niebuhr, *Beschrijving van Arabië*, 1774, Plaat IX を参照したということが分かる。そこには Taās に近い Thöbād のモスクのものであるヒジュラ暦540年の紀年をもつ碑文の模写が掲げられている。

最初の行の括弧でくくられた語は、存在したはずであるが、そこには線がみえる。5行目と7行目の空白のままの2語は、いまだ決定的な読みを見出すに至っていない〔この部分は後の研究で補われている——補論参照〕。

翻訳は次のようである：

慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において。地上に生きる人間は、はかなさに支配されている；しかし、栄光にみち、壮麗なる汝が主の顔は永遠に残るであろう¹⁷⁾。これは、ヒバトゥッラー〔“アッラーの贈り物”の意〕の息子であるマイムーンの娘、殉教者たるファールティマ——彼女は495年のラジャブ月〔ヒジュラ暦第7月——訳者注〕の7……が経過した金曜日に、アッラーの恩寵のもとへと帰った——の墓である。……。崇高なるアッラーが真理を語り、アッラーの高貴なる使徒もまたしかりである。

ヒジュラ暦495年は、西暦の1102年あるいはシャカ暦の1024年にあたる〔その後の研究でヒジュラ暦475年に修正された——補論参照〕。

すでに述べたように、すべての文字を分析することが私の狙いではないとはいえ、やはり、日付と私が5行目と7行目にそのまま残しておかねばならなかった語について2～3の所見を述べなければならない。

سبعة [sab'a "7"] ——〔この読みは〕不確かであるが——の後ろに、人は ليل (LY'L) か ليالي (LY'LY)、あるいは ليل (LYL) か ليلة (LYLt) を想定するであろうが、かなり明瞭に読みとれる線から、これらの単語ではありえない。

[原文 p. 397, l. 1~]

当該箇所では線をねじまげることなく私が読むことができるかもしれない唯一の単語は عتم ['atm] (夜のお祈り) であるが、この言い方にはいまだかつて日付のなかで出くわしたことがなく、私はその箇所を空白にしておく。

さらに注目すべきことは、その年号のうちすべての単語が誤って書かれているということである。

400がない。というのも、刻字工がミームの文字 (م; m) を〔つけることを〕忘れて أربعماية (arba' mi'a "400") のかわりに أربعاية と書いているからである。90もやはりない。というのも、かれは تسعين (tis'ina "90") とあるべき箇所に تسعين と刻んでおり、文字（ないし線）がひとつ多いからである。

خمسة [khamisa "5"] という単語もない。というのも、シーンの文字 (س; s) を形作るべき3つの線が結びつかず互いにぶつかりあっている。

したがって、私は最初に594と書かれていたかもしれないと考えた。

私が疑いなく90と読み、70を受け入れないというようなことは、技術的な問題である。ターの文字 (ت; t) が明らかにシーンの文字の下部に結合しており、まるで

17) 第55章、第26-27節。翻訳：S. Keyzer, *De Koran*, 第2版, 1879, p.737.

シーンの文字の一部のようになってしまっている。もし刻字工自身が誤ったのであり、[本当は] سبعين (sab‘īna “70”) と書きたかったであれば、かれは刻文に損害を与えることなく、容易にターの文字を取り除くことができたのである〔その後の研究ではここを70と解し、紀年をヒジュラ暦475年とする〕。

いま、私が7行目において空白にしている単語については、私は自分の無力を告白しなくてはならない。تعالى (ta‘ālā “崇高なる”) ではありえず、ほかのアッラーに対する形容語句を、私はまだ見ることができる線から再構成することはできない。

私がこの箇所を読むことができるかもしれない唯一の単語は عليها (‘alayhā “そこに”) であるが、その単語はそこには適合せず、ゆえにこの件にかんしてはなお沈黙を守るのが適切である。

5. レラン墓石は到来品

[原文 p. 397, l. 24~]

この墓石の解説から明らかになることは、われわれがこの1102年に亡くなったファティマ〔カルス&ギョー論文で否定〕と1419年に亡くなったマリク・イブラヒムの間に繋がりをもとめる伝承に同意することはありえないということである¹⁸⁾。

われわれはここで、二者択一をしなくてはならないと私にはおもわれる。1391年にプトリ・スワリを死亡させる伝承にこだわるのか。その場合にはわれわれは、今はレランにあって彼女の墓に属するものとして提示された、上に記録した墓石を完全に放棄しなくてはならない。あるいは、われわれはマイムーンがチュルメンの王侯であることと、ファティマがプトリ・スワリと同一人であるということを受け入れなくてはならない¹⁹⁾。

後者の場合には、この伝承〔の信ぴょう性〕が大いに疑われることは明白である。

しかも、ラデン〔ジャワ貴族の称号〕・フセイン・ジャヤディニングラット博士はそうのように感じ、それに関し、チュルメンの王侯の旅はマジャパヒトではなくカフリパン〔スラバヤに近いジャワ東部ブランタス河下流の都市、11世紀のカフリパン王国の都——訳者注〕に当てはめられると、あえて推測した。

私の意見では、それによって事柄が明らかになるわけではない。ただし、その墓石の年号がその推測を許すことを私はただちに認めるけれども。

[原文 p. 398, l. 1~]

しかし、かなりはやく、つまり西暦1102年に、すでにジャワのイスラム化への努力が行われ、すでにそのとき、ムスリムの居留地がレランに見られたであろう、と

18) フセイン・ジャヤディニングラット Djajadiningrat, Hoesein 博士がすでにかれの博士論文 *Critische beschouwing van de Sadjarah Bantén* (1913, pp. 250-253) でそれはありえないことを示した。

19) 後者の仮定は私の意見ではとても奇妙に感じられる。というのも、その墓碑には故人にも、彼女の父にも祖父にも肩書が与えられていないからだ。

いうことは、私はまったく受け入れることはできない。

私の推測——より妥当なものがあれば私はそれをよろこんで放棄するが——は、ファーティマの墓石はプトリ・スワリとは全く無関係であるばかりか、ジャワのものであったのでもなく他の所から持ち込まれたのであるというものである。どのようにして、なぜ、いつ、といったことは未解決にしておこう。

ラッフルズとファン・ホエフェルがこの墓石について述べていないことは、私にはすでに奇妙であるとおもわれるが、もっとも奇妙なことは、ブルムントがアラビア語碑文をもつ墓石の断片だけしか見なかったということである²⁰⁾。

私の意見では、かつてマリク・イブラヒムの墓石について私が証明したように、英領インドからこの墓石は来たのではない。

その墓石は明らかに「マリク・イブラヒムの墓石のような」規格品ではなく、したがって、すでに12世紀初頭において、ましてジャワに向かって、墓石の輸出があったとは私は信じない。

その墓石がコルネッツ・ド・フロートによって1822年に、ブルムントによって1868年に目撃され、さらに1907年にクネーベルによってよりはっきりと記されたものと同じであると仮に認めるとしても、いかにしてその墓石が何百年にもわたってレランにおいてその刻文を保ちえたのか、私は不思議に思う。

1822年にその小屋の屋根がすでにつぶれていたのかどうかは実際のところ分らないが、ブルムント博士はそこで同じその哀れな状態に出くわし、「その建物には屋根があったが、崩落したと考えられる」と言う。このことを考慮すれば、その崩落はかれの訪問のずっと以前に起こっていたに違いないということは、私には非常に受け入れやすい。

私に十分に知られているのは、次のことである。

ドミニウス〔牧師〕・ファン・ホエフェル（1847）のときには、マリク・イブラヒムの墓の石蓋のコーラン章句のすべてがまだ見えなくなっていなかっただけでなく、明瞭であったために、あるジャワ人がかれのためにその模写を作ることができ、〔*Reis over Java, Madura en Bali, 1847, vol. 1*〕154ページの写真に見えるような標準的なアラビア文字に転写することができたのである。リンクス博士は1912年に同じ石板の写真を撮るが、そこから、枕もとの四角いクーフィー体の碑文を除いては、もはや文字を読み取ることができなかったことがはっきりする。

約65年の間に、硬くて白い大理石の石、そして、深く刻まれた碑文に、それは起こったのだ！

われわれのレランの墓石は、はるかに軟らかい石質であるばかりでなく、そこには非常に浅く彫られていたのであり、8世紀近い古さなのであり、私の意見では、コ

20) それともこの断片はマリク・イブラヒム〔ファーティマの誤か——訳者注〕の墓の横にある墓群のうちの痕跡をなくしてしまった墓石のことであろうか。リンクス博士はその特別調査に着手したが（それをその墓群の中で見つけることができると我々は考えた）、何も見つからなかった。

ルネッツ・ド・フロートの訪問から1世紀のうちでさえ傷むばかりか読むことができないほど風化してしまうに違いない。

前述したように私は、その墓石が英領インドに由来するとは信じない。

[原文 p. 399, l. 1~]

私の確信を揺るがしうるような墓石や他の碑銘についての記述も写真も、今日にいたるまで私はまだ見つけていない。

ただ私は、クーフイー体の刻文をもつ墓石の画像を見つけた。ひとつはヒジュラ暦437年の紀年をもつ現在はカルカッタ博物館にあり²¹⁾、もうひとつはヒジュラ暦439年の紀年をもつ現在は英国にあり²²⁾、どちらの墓石も1805年、当時 G・ヴァレンシア Valentinia 卿とともに旅行したザルト Salt 氏が（マスア近くのダラク・アル=キブルにて）古い墓地から持ち帰ったものである〔マスアは紅海に面するアビシニア地方の港町。対岸にダラク島がある——訳者注〕。

石材の種類や書体が異なっていることを除き、その描写は（*Journal of the Asiatic Society*, p. 875）非常に強くわれらのレランの墓石を彷彿とさせ、そしてまた G・C・ハウフトン Houghton 氏は（*Transactions of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland*, vol. II, p. 576）、最初にその刻文がとても浅く彫られているということを報告したあとで、「同様の石がわれわれの気候のもとにさらされたなら20年もすればさらに風化が進むだろう」と述べる。

ここでさらに答えを出すことのできない問いを提起したい。レランの墓石は降水量の乏しい地域——例えばアラビア半島かそのあたり——から、ジャワへもたらされたのではないか？

6. 墓廟の写真（リンケス、1912年）

[原文 p. 399, l. 19~]

この問いに対する解答は、適任者のために喜んで残しておいて、次に、最初に私を取り上げた、リンケス博士が私に論文で発表するために譲ってくれたレランの祠堂の写真に対して、さらに若干言及しておきたい。私が知る限り、今日までその画像は紹介されていない。

写真3には、一つの門をもつ壁が写っている。門の中に、ドアが付いていてそこから本来の墓廟へ入ることを可能にする（写真4を見よ）。その本来の墓廟についてクネーベルは次のように述べる。「屋根はなく、建物の南側の中央部に幅2.5メートルの亀裂があり、そこを新しく煉瓦の構造物で補修していて、そこに小さな扉が取り付けられ、そこに到達する三段の階段がある。」

われわれの写真において、それらのすべてがはっきりと視認でき、そして、今は

21) [Anonym.] *Journal of Asiatic Society*, 1837, p. 873以下。

22) [Houghton] *Transactions of the Royal Asiatic Society of Great Britain & Ireland*, vol. II, p. 573以下。

新式のランプがついている2本の柱は、最近のものであるとみてよいと私は信じる23)。

ところが、私が指摘したい重要なひとつの事柄は、おそらく彼が訪問した間、それは繁茂した植物によって覆われていたため、クネーベルの目には止まらなかった。しかし、それはリンクス博士のレンズを通してわれわれに示されている。それは、新しい煉瓦の構造物の中央、扉の上の半月である。

これはラッフルズやコルネッツ・ド・フロートが語る月が刻まれた墓石なのか？それは分らない。

1919年11月 ウェルテフレーデンにて

補論——イスラム碑銘学と海域史の視点から

以下、その後の研究動向を踏まえて、レランの碑文について分かっていることを詳しく述べることにしたい。モケットによるレランの墓石の碑文テキスト読解については、その後、修正案が提示されている。まず、墓主の名ファーティマが修正の結果消えている。ついで重要な修正ポイントは紀年であろう。モケットが示したヒジュラ暦495年(1102 CE)は、フランス極東学院のルイ・シャルル・ダメー Louis-Charles Damais によってヒジュラ暦475年(1082 CE)に修正された [Damais 1957: 365, 1968: 570-571]。碑文の文字の読みからはどちらとも決めがたいが、日付と曜日の一致から後者が妥当と判断されるためである。次に最新のカルス&ギョー論文の転写と訳を掲げておく [Kalus & Guillot 2004: 26-28]。

転写：

بسم الله [الرحمن الرحيم كَل من]	١
عليها فان و يبقى وجه ربك ذو الجلا	٢
ل و الاكرام [هذا] قبر المتوقية ا	٣
لعاصمة بنت ميمون بن هبت (sic) الله توفيت	٤
في يوم الجمعة (ل) سبعة ليلي خلون من رجب	٥
و في سنة خمسة و سبعين و اربع (م)اية الى رحمة	٦
الله عالم الغيب صدق الله العظيم و رسوله الاكريم	٧

和訳：

慈悲ふかく慈愛あまねきアッラーの御名において。地上のものはみな儚く消え、永遠に変わらぬは威風堂々たる主の御顔のみ [『クルアーン』第55章、第26-27節 [井筒訳1957 下:164]]。これは、罪を犯さぬよう気を配り、過ち

23) 左の柱に向かってわれわれの石が立っている。それは明らかにリンクス博士によって外へ運び出された。

を免れし者、ヒバトゥッラーの息子であるマイムーンの娘の墓である。彼女は475年のラジャブ月の8日の金曜日、「明かされざることをも知りたもう」アッラーの恩寵のもとへと帰った。強大なるアッラーが真理を語り、アッラーの寛大なる使徒もまたしかりである。

モケットが墓主の名ファティマ (فاطمة Fāṭima) と読んだ部分は、カルス&ギョー論文では العاصمة (al-ʿiṣma “罪を免れた者 qui fut à l’abri de la faute”) に修正されている。

冒頭に紹介したように、モケットは論文の最後の方で、レランの墓石は(インドからではないものの) アラビアなど乾燥地域から運ばれてきたものではないかという見解を示し、その検証を専門家にゆだねた。ちなみにモケットは本論文執筆の前に、グルシックのマリク・イブラヒムのイスラム墓石 (1419 CE) とスマトラ北部にあるパサイのイスラム墓石 (1428 CE) について論文を発表し、それらがインドのカンベイのもの (1333 CE) と同じ規格であり、インドから墓石の輸出が行われたことを明らかにしていた [Moquette 1912]。しかし、12世紀段階でそうした規格品の輸出があったということに対しては懐疑的であった。

この問題について、レランの墓碑についてのカルス&ギョー論文 [Kalus & Guillot 2004; Guillot & Kalus 2008: 11-31] の要点を紹介すれば、まず、結論はモケットの想定と同じくレランの墓石は外部からジャワにもたらされたと考えている。ただ、モケットは紅海沿岸のアビシニアの碑文との字体の近似性を指摘するに留まったのに対し、カルスらは自らが開発したイスラム碑文データベース *Thesaurus d’épigraphie islamique* を駆使して、墓碑のテキスト (『クルアーン』第55章、第26-27節) は上エジプトと共通し、書体はイランと近似するという結論を導き出す。このデータベースの最新版へは Max van Berchem Foundation のサイト (<http://maxvanberchem.org/>) からアクセスでき、メール・アドレスとパスワードさえ登録すればオンラインで閲覧可能である。ただし、筆者が本人から聴いた話ではイランのイスラム碑文についてはデータが不十分であるとのことである (カルス&ギョー論文によればシーラーフ以外での調査が進んでいない [Kalus & Guillot 2004: 35])。

これまでもカルス・ギョー両氏は有名なチャンパのイスラム碑文についても、同様に外部から持ち込まれたことを論じ、それを現地で作られたものとみたラヴェスの論文に反駁しているほか [Ravaisse 1922; Kalus & Guillot 2003]、ブルネイやアチェ、サムドゥラ、パサイなど東南アジア各地のイスラム碑文について精力的に研究を発表し、それらのうちインドネシアに関するものはインドネシア語で出版された [Guillot & Kalus 2008]。またイスラム碑銘学を専門とするカルス氏には、中国の陳達生と共同で泉州イスラム石刻の解説というまとまった成果もある [Chen et Kalus 1991]。

さて、両氏は結論として、レラン碑文はヒジュラ暦475年 (1082 CE) にイスラム世界のどこかで作られたのち、レランが貿易港として機能していた12～14世紀の間に船のバラストとしてジャワ島に運ばれて来たものと推論している。理由は、①レランの墓地に残された他の摩滅した墓石 (元来は四つあったが三つしか確認されて

いない) がレラン碑文と同じ材質、デザインのもので一連のものとするべきこと。
②その内一つには礎石として使われたらしい加工が施されていること、③パリ在住で1年以上ジャワ島・スマトラ島に滞在歴のある地質学者 M・A・フェディアフスキー Fediaevsky の鑑定によれば、レランの墓石は灰青色の上質な大理石であり、それはジャワ産のものではないと見られること、④石の傷み具合が、海水にさらされたことによるものと推測されること、等である。両氏は、レランの墓石群は、当地産のものではなく、後世に他所から持ち込まれたものである以上、この墓石を——ラヴェスが主張したように——ジャワにおけるムスリム・コミュニティの存在を示す証拠とすることは不可能となった、とする [Kalus & Guillot 2004]。

しかし筆者は、レランの碑文がジャワと中東を結ぶ交易ルートの存在について語るところが全くない、とは考えない。カルス&ギョー論文の墓石についての詳細な分析は、この墓石の背景をめぐる問題に対して、豊富な検討材料（または課題）を提供したといえよう。

カルス&ギョー論文では、レランの墓石がジャワに運ばれた年代を12～14世紀と見積もる。それはおそらく同じく Archipel 誌上に掲載されたレランの考古学調査の論文に基づくであろう [Harkantiningasih 2002: 25]。ただし、そこには、出土中国陶磁の年代別グラフが掲載されている。それをみればピークはほぼ12世紀である。レランに限って言えば、その港市機能のピークは12世紀と認められ、レランの墓石の運搬もその時期に行われた確率は比較的高いとも考えられる。しかし、レランの墓石がプトリ・スワリの伝承との関わりで再利用される動機が生じるのは14世紀であるから、それを考慮すれば14世紀を下限とすることは妥当といえる。

ここで、12～14世紀の東南アジア島嶼部、広くはインド洋海域世界の交易について考えると、従来よりペルシャ系海上商人の旺盛な活動が知られている。このことは、カルスらによって指摘された、レランの碑文の文字装飾にイラン的特徴が見いだされるとの指摘と合致する。

他方、12世紀までにはイスマール派を奉じるファティマ朝がテュニジアからエジプトへ進出し、さらに東方へと教宣活動を展開していた時期に当たる [Jiwa 2009: 25-28]。カイロ・ゲニザ文書からは、同時期に、ファティマ朝の商船が紅海ルートでインド洋へ展開し、さらに東南アジアを経由し中国方面と通商関係を持ちはじめたことも示唆され、それが14世紀の мамルーク朝期まで持続していたことは十分想定される。こうした時代背景はレランと上エジプトとの関係性を支持するかのようである。

では、レランの碑文にとって、イラン的特徴と上エジプト的特徴とは、いずれがより重要といえるのか。つまり、それぞれの地域の墓石とレランの碑文とのテキスト文面の類似性を重視すべきなのか、それとも文字の装飾的特徴の近似性を重視すべきなのか。

カルスらによってエジプトないし上エジプトと結びつけられた『クルアーン』第55章、第26-27節の章句の引用は、実は、スマトラ島北部のパサイや、中国の泉州出

土の墓石にも多数見られる [Guillot & Kalus 2008: 153, 158, 172-4; Chen et Kalus 1991, Nos. 15, 17, 23, 27]。ただ、パサイや泉州の墓石は前者が13世紀後半から14世紀半ば、後者は15世紀半ば頃のものである。1100年の時点では、アジアの沿海地域へのイスラム墓碑文化の広がりには限られていた [Kalus & Guillot 2004: 35]。この時期的条件の下でこの章句をもつ墓石の例は、エジプトないし上エジプトが主であるので、その淵源をそこに結びつけることは妥当と評価できる。

次に、碑文のアラビア文字の装飾については、カルスの指摘するように、既知のイスラム石刻群のなかでは、イランのクーフィー体の墓石にその特徴はもっとも近似するようにみえる。ただ、まったく同じであるとも言い難い。データの不足もからむが、レランの墓石にみられるクーフィー体の装飾をイラン的特徴とみなすことは、ひとつの可能性の域を出ないのである。イスラム美術史のシーラ・S・ブレア Sheila S. Blair は810/811 CE から ca. 1106 CE までの79件のイランおよびトランスオクシアナの初期イスラム碑文を整理しているが、そのなかには、レランの墓石にみえる『クルアーン』第55章、第26-27節の章句をもつものは見いだせなかった [Blair 1992]。

一方で、レランの碑文は、同じ『クルアーン』の章句（第55章、第26-27節）をもつパサイや中国泉州の石刻とは、字体も文字に加えられた様々な装飾要素も、あまり似ていない。今後の研究によって、レランの碑文とテキスト内容も文字の装飾も明らかに共通する特徴を有する碑文の存在が明らかになれば、その由来についての分析は劇的に進展するかもしれないが、現時点ではそういう証拠はみつかっていない。したがって、例えば、上エジプトからペルシャ湾岸地域への移民集団が、テキストは上エジプトと共通し、墓石の外形的特徴はそこで独自のものを発展させた、というようなことを想定するようなことも現段階では困難である。

一方、モケットの論文で指摘されている、ザルト氏がアビシニア地方のマスア近くのダラク・アル=キブルの古い墓地で獲得したという10世紀の2つのイスラム教徒の墓碑に見える特徴的なクーフィー体との類似性については、十分な再検討がなされていない。アビシニア地方は上エジプトと近いこともあり、関連性をもつ可能性がもっと注目されても良いかもしれないが、モケットが言及したダラク・アル=キブル由来の2つの墓碑はレランの墓碑にみられる『クルアーン』の章句（第55章、第26-27節）を共有していない。また、14世紀時点で同じ『クルアーン』の章句を有する碑文を有するスマトラ北部のパサイや中国の泉州と上エジプトやレランの間には何か関係があるのか、または偶然の一致に過ぎないのか。あるいはまた、特定のイスラーム法学派の広がりや、法学者などの人的な交流を反映するのか、など可能性は様々に考えられる。レランの墓碑をめぐるこれらの奇妙な一致の背景の解明は、海域史研究に重要な意義をもちうるのではないか。

[参考文献]

- Anonym. (1837) “Arabic Tombstone in the Society’s Museum (IV. Facsimiles of Ancient Inscriptions, lithographed by James Prinsep, Sec. As. Soc. & c.).” *The Journal of the Asiatic Society of Bengal* vol. 6, pt. 2 (no. 70), pp. 873-876.
- Anonym. (1912) *Notulen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen*, p. 53.
- Blair, S. S. (1992) *The Monumental Inscriptions from Early Islamic Iran and Transoxiana*. Leiden: E. J. Brill.
- Brumund, J. F. G. (1868) *Bijragen tot de kennis van het Hindoeïsme op Java (Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen 33)*. Batavia: Lange.
- Chen Da-sheng et L. Kalus. (1991) *Corpus d’Inscriptions Arabes et Persanes en Chine: 1. Province de Fu-Jian (Quan-zhou, Fu-zhou, Xia-men)*. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner S. A.
- Crawfurd, J. (1820) *History of the Indian Archipelago: Containing an Account of the Manners, Arts, Languages, Religions, Institutions, and Commerce of its Inhabitants*. 3 vols. Delhi: Low Price Publications (Reprint, 1993).
- Damais, Louis-Charles. (1957) “Études javanaises: I. Les tombes musulmanes datées de Trâlâyâ.” *Bulletin de l’École Française d’Extrême-Orient* 48, no. 2, pp. 353-416.
- (1968) “L’épigraphie musulmane dans le Sud-Est Asiatique.” *Bulletin de l’École Française d’Extrême-Orient* 54, pp. 567-604.
- Djajadiningrat, Hoesein (1913) *Critische beschouwing van de Sadjarah Bantën*. Haarlem: Joh. Enschedé en Zonen.
- Faulmann, K. (1880) *Illustrierte geschichte der schrift: Poulär-wissenschaftliche darstellung der entstehung der schrift, der sprache und der zahlen sowie der schriftsysteme aller völker der erde*. Wien, Hartleben: Verlag.
- Federspiel, H. M. (2007) *Sultans, Shamans, and Saints: Islam and Muslims in Southeast Asia*. Honolulu: University of Hawai’i Press.
- Groot, A. D. C. de (1852) “Bijdrage tot de kennis van de zeden en gewoonten der Javanen: III. Oudheden en Fabelleer.” *Tijdschrift voor Nederlandsch-Indië*. 14e jaargang, vol. 2, pp. 393-422.
- Guillot, C. & L. Kalus. (2008) *Les monuments funéraires et l’histoire du sultanat de Pasai à Sumatra: XIIIe-XVIe siècles* (Cahier d’Archipel 37). Paris: Association Archipel, École de Hautes Études en Sciences Sociales.
- (2008) *Inskripsi Islam tertua di Indonesia*. Ed. by Willem van der Molen. Jakarta : KPG (Kepustakaan Populer Gramedia), École Française d’Extrême-Orient, Forum Jakarta-Paris.
- Hageman, J. (1852) *Handleiding tot de kennis der geschiedenis, aardrijkskunde, fabelleer en tijdrekenkunde van Java*. Batavia: Lange.
- Harkantiningasih, N. (2002) “Le site de Leran à Gresik, Java-Est: Étude archéologique préliminaire.” *Archipel* 63, pp. 17-26.
- Haughton, G. C. (1829) “Account of an Ancient Arabic Grave-Stone, Found at Dhalac-el Kibeer, near Massowah, Abyssinia.” *Transactions of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* vol. 2, no. 1, pp. 573-579.
- Hoëvell, W. R. van (1849-1851) *Reis over Java, Madura en Bali in het midden van 1847*. 2 vols. Amsterdam P. N. van Kampen..
- Jiwa, S. trans. (2009) *Towards a Shi’i Mediterranean Empire: Fatimid Egypt and the Founding of Cairo*. London: I. B. Tauris.
- Kalus, L. & C. Guillot. (2003) “Réinterprétation des plus anciennes stèles funéraires islamiques

- nousantariennes: I. Les deux inscriptions du ‘Champa’.” *Archipel* 66, pp. 63-90.
- (2004) “Réinterprétation des plus anciennes stèles funéraires islamiques nousantariennes: II. La stèle de Leran (Java) datée e 475/1082 et les stèles associées.” *Archipel* 67, pp. 17-36.
- Keyzer, S. (1860) *De Koran, voorafgegaan door het leven van Mahomet, eene inleiding omtrent de godsdienstgebruiken der Mahomedanen, enz.* Haarlem: J.J. van Brederode (Reprint, 1879).
- Knebel, J. (1907) “Beschrijving der Hindoe=oudheden in de afdeelingen Grèsik (waaronder de voormalige afdeeling Sidajoe) en Lamongan (Residentie Soerabaja).” *Rapporten van de Commissie in Nederlandsch –Indië voor Oudheidkundig Onderzoek*. pp. 245-271.
- Moquette, J. P. (1912) “De grafsteenen te Pasé en Grissee vergeleken met dergelijke monumenten uit Hindoestan.” *Tijdschrift voor Indische taal-, land- en volkenkunde* 54, pp. 536-548.
- (1921) “De oudste Moehammedaansche inscriptie op Java n.m. de grafsteen te Lèran.” *Handelingen van het eerste congres voor de taal-, land- en volkenkunde van Java, Solo, 25 en 26 December 1919*. Weltevreden: Albrecht, pp. 391-399 + 4 fotos.
- Niebuhr, C. (1774) *Beschrijving van Arabië*. Amsterdam & Utrecht: S. J. Baalde & J. van Schoonhoven.
- Raffles, T. S. (1817) *The History of Java*. Complete Text, with an Introduction by John Bastin. Kuala Lumpur: Oxford University Press (Reprint, 1988).
- Ravaisse, P. (1922) “Deux inscriptions coufiques du Champa.” *Journal Asiatiques* 11, 20, pp. 247-289.
- (1925) “L’ inscription coufique de Lèran à Java.” *Tijdschrift voor Indische taal-, land- en volkenkunde* 65, pp. 668-703.
- Ricklefs, M. C. (2006) *Mystic Synthesis in Java: A History of Islamization from the Fourteenth to the Early Nineteenth Centuries*. Conneticut: Eastbridge.
- Robson, Stuart & Singgih Wibisono. (2002) *Javanese English Dictionary*. Hong Kong: Periplus Editions.
- Veth, P. J. (1875-1884) *Java, geografisch, ethnologisch, historisch*. 4 vols. (2nd edition, 1912) Haarlem: F. Bohn.
- Wiselius, J. A. B. (1876) “Historisch onderzoek naar de geestelijke en wereldlijke suprématie van Grissé op Midden en Oost Java gedurende de 16e en 17e eeuw.” *Tijdschrift voor Indische taal-, land- en volkenkunde* 23, pp. 458-509.

桃木至朗他編 (2008) 『新版東南アジアを知る事典』 平凡社.
井筒俊彦訳 (1957) 『コーラン』 全3冊, 岩波書店.

写真 1 レランの墓石

Foto 1.



Grafsteen van Lérán.

写真2 レランの墓石、かつてどのようなであったか示すため加筆したもの

Foto 2.



Grafsteen van Lérans. Bijgewerkte inscriptie, om te doen zien, hoe die er vroeger ongeveer uitzag.

写真3 グルシック県レラン，北側から見たプトリ・デウィ・スワリ墓廟の門

Photo 3.



*Leran, afdeeling Grisse.
Poort van het graf van Poetri Dewi Swari, vanuit het Noorden gezien.*

写真 3a. レランの墓廟（囲壁の外側）。（写真 3 と重複）

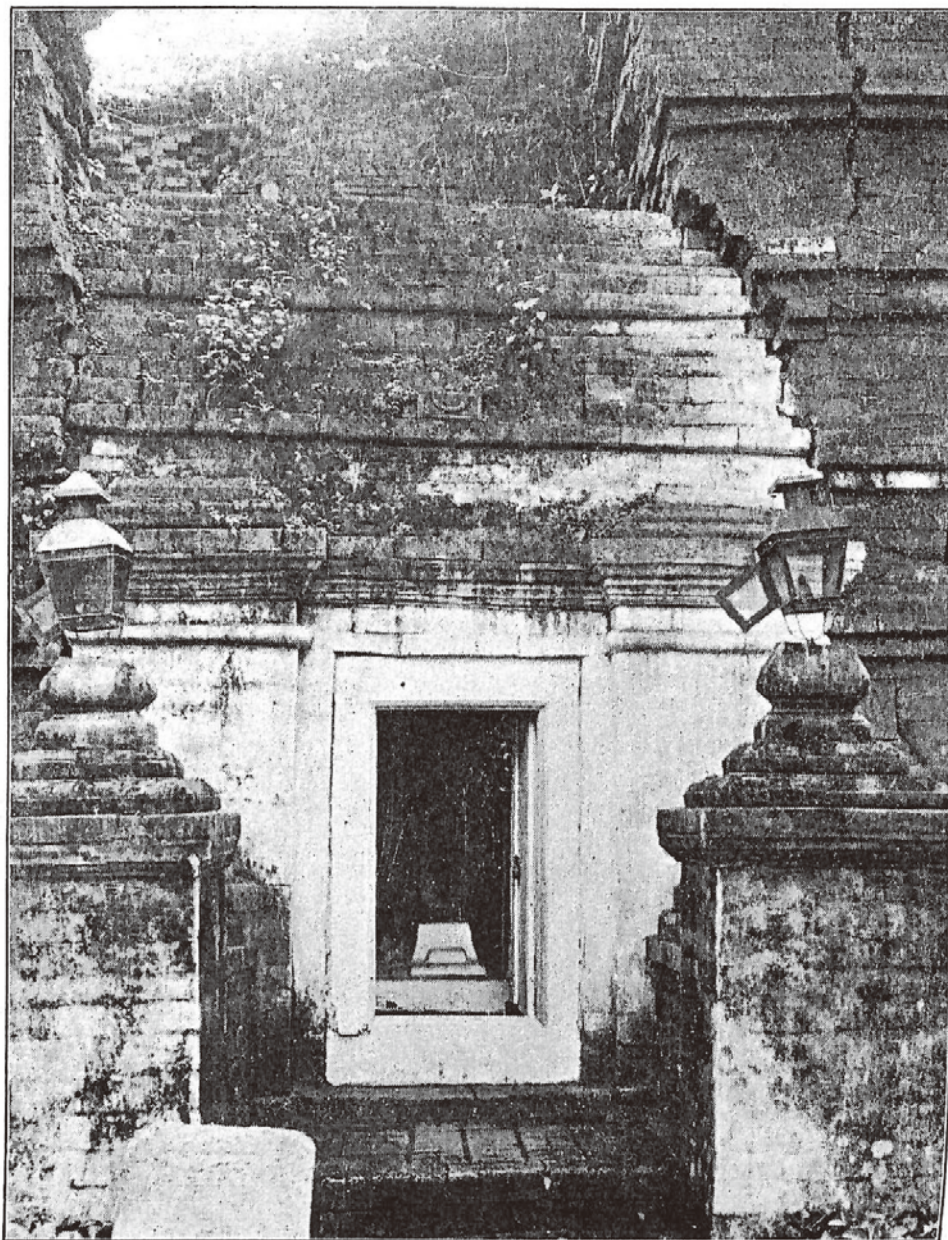
Foto 3a.



*Grafgebouw te Lérán (buiten de ommuring).
(Duplicaat van Foto 3.)*

写真 4. レランの墓廟（囲壁の内側）

Foto 4.



Grafgebouw te Lérán (binnen de Koeta).

表 ジャワ語等由来固有名詞の表記

モケット論文では現地語（ジャワ語等）由来の固有名詞の大部分がオランダ語表記されているが、それらは日本語や英語において一般的な表記法と異なる。本稿ではカタカナ表記する際、極力（『新版東南アジアを知る事典』等の）一般的な表記法を採ったが、以下に原著での表記、および現在一般的に用いられるジャワ語・インドネシア語また英語のアルファベット表記も併記しておく。

カタカナ表記	原著の表記	現在の表記
カフリパン	Kahoeripan	Kahuripan
カヤーウランー プトリーイク（コヨーウラ ンープトリーイコ）	Kaya-woelan-Putri-iku, (Kâjâ-woelan-poetri-ikâ)	Kaya-wulan-putri-iku
グダ	Gěḍah (Gedah)	Gědhah
クブル・パンジャン	koeboer pandjang	kubur panjang
グルシック	Gěrsik	Gresik
サリヴァナ	Salivana	
タフンーギドゥルー ブミーグロン	Tahoen-ngidoel- Boemi-ngoelon	Tahun-ngidul- bumi-ngulon
ダラク・アル＝キブル	Dhalac-el-Kibyr	Dhalac el-Kibeer
チュルメン（チュルメ）	Tjěrmén (Tjěrmé)	Cěrmén (Cěrme)
チョンドロ・スンコロ	tjondro-senggkolo	condro-sengkolo
テルナテ	Ternate	Ternate
パサイ	Pasè	Pasai
ハジ・アブドゥルガニ	Hadji Abdoelgani	Haji Abdulgani
ババッド	Babad	Babad
プトリ・デウィ・シティス ダリ	Poetri Dewi Sitisoadari	Putri Dewi Sitisudari
プトリ・デウィ・スワリ	Poetri Dewi Soewari	Putri Dewi Suwari
プトリールサックーナワン ーウラン	Poetri-roesak-nawan-woelan	Putri-rusak-nawan- wulan
ブルミン	Běřėmin	Běřėmin
ボレー	Boree	Borėh
マイムーン	Maimoen	Maimun
マウラナ・イブラヒム	Maulana Ibrahim	Maulana Ibrahim
マジャパヒト	Mâdjâpahit	Majapahit
マスア	Massouah	Massouah
マヘサン	Mahesan	Maesan
ラジャ（ロジョ）	Radja (Râdjâ)	Raja

ラデン・アディパティ・ア リオ・スリオ・ウィンोट	Raden Adipati Ariâ Soeriâ Winâtâ	Raden Adipati Ario Su- rio Winoto
レラン	Léran	Leran